

二〇二〇年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日(午後) 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は17ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙だけでなく問題冊子も集めます。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

彼は、妻がこの世の中からいなくなつて最初の虚脱きょだつを覚えたとき、不思議なことに、第二次大戦で日本が敗れたときに覚えた虚脱を、まざまざと実感において思いだし、それらの二つがどこかしら似ていることに、大いに驚いたものであった。世界はふやけ、日常の生活は無表情に、しかし、確実に流れ、空の澄んだ青さを眺めてみると、まるで凄惨せいさんな何ごとも起こらなかったか①のようである。彼は、戦争が終わったとき、むしろほつとして喜んだ方であるから、それらの二つの虚脱の相似は、まことに奇妙みょうなことに思われた。

彼は、妻の病気の終わり頃ころは、その死を予感しながら、もし戦争にたとえるなら、敗戦を覚悟で最後まで徹底的にたたかう兵士のような気持ちで、彼女の看護にあたっていたと言つてもいいかもしれない。夏の暑い毎日、病院へ通う坂道を登りながら、彼はしばしば、なぜか、シジフォス（注し）が受けたあの刑罰を思い浮かべていた。山の頂きから、永久に繰返して転げ落ちてくる重たく大きな石を、山の頂きへ、永久に繰返して押し上げなければならぬ空しい苦役。しかも彼は、それを、終りのない絶望には、戦争末期の日本のゆえに羨うらやましいと思ひ、また、幸福であるとき感じたものである。そうした、彼の救いのような絶望には、戦争末期の日本の、あの苦しい喘あえぎと、どこかしら似通うものがあったと言つていいかもしれない。

しかしまた、それらの二つの虚脱には、決定的に異なつているところもあった。日本が戦争に敗れたときには、彼には一種の解放感があったし、祖国は滅亡めつぼうせず再建されるだろうという、のんびりした他人まかせの安堵感あんどもあったが、妻が死んだとき、彼には、彼女はもう決して戻もどつてこないのだという喪失感そうしつ、あるいは空白感くわんぱくしかなかったからである。

そのような悲しみが、彼女が死んでから八箇月はちかげつほど経たつた現在でも、なお、彼の毎朝の眼覚めの心を、大きく支配しているのだ。彼は、そうした傷心かみを抱かかえて、積極的に生きようとする努力を、試みていないわけではない。いや、以前にもまして、彼は自分の仕事に熱心に打ち込んでさえいるほどであるのだが――。

（中略）

妻が病気であった頃、やはり、朝の深い悲しみにおそわれていたことを、彼はよく記憶している。しかし、それは、ずいぶん感じがちがうものであったと思うのだ。

彼は、妻を少しでも元気づけるために、また、少しでも楽しませるために、さまざまな工夫をこらした詩を書いて見せたこと

があつた。それは、その頃の彼の朝の悲しみを踏まえたもので、その悲しみの性質がよく出ているように彼には思われる。それは、一口で言うと、生き抜くことを歌いあげようとするものであつた。「希望」という題名も、そのことをかたどっていただろう。(A)、彼の心の中では、「希望あるいは絶望」としたほうが、より正確であつたかもしれない。(B)、そのとき、彼の心にとつて、希望という言葉と絶望という言葉は、内容がほとんど同一であつたから。(C)、妻のためには、もちろん、明るい題名の方が好ましかつた。それは、こんな詩であつた。

希望

(注②)
月天心貧しき町を通りけり

蕪村

眠る貧しい町の はるか真上で
残された時間の
数字の消えた文字盤に
見えない長針と短針を垂直に重ねる
まっしろな月のように。

横なぐりの吹雪にざわめく
森のなかの 小さな空地に
追いつめられた喜びの 舌の先を
(D) () いくつも羽ばたかせる
焚火の焰のように。

④ 空の青と砂の黄を 単純につなぐことで
逆に深く引き離している 砂漠の地平線に
タツノオトシゴなどを吹きあげ
近づこうとすれば 遠ざかる
はなやかな幻の噴水のように。

途方もなく高く聳え その太い幹に

(E) 涼しいトンネルがあげられ
幌馬車や蟻の行列が

(F) そこを通っている
深い緑の樹の茂みのように。

演奏を前にしてざわめいている

都会の夢の気流の オーケストラの
楽器たちの淡い吐息を

くまなく集めては するどく発射する
巨大な鉄骨の尖塔のように。

空に向けられた槍がならび

金色の小鳥たちは 飛び立って帰らず
十字架が芽生え

香水の陽炎がゆらめく
さびしい山の頂きのように。

(気が遠くなるほど遠い昔から

思えば ふしぎな直立の姿で

人間は歩いてきているのだが。)

眼覚めることがどんなに悲しいか。

おお それとは無縁な花花が

明るく眩しい光線の海の底で

さりげなく開いている 朝の窓への

新しい太陽のように。

彼の妻は、そのとき、冬の明るい午後の居間で、石油ストーヴをかたわらにし、肘掛け椅子に腰をおろして、ちょうど家族の下着の繕いものをしていたが、その手を休めて、この詩をゆっくり読み、

「いいわね」

と一言だけ答えた。

その簡単な言葉は、しかし、彼にとつて二重に貴重であった。もともと、彼が書くものについて一番率直な読者の反応として、妻の答えは大切であったが、そのときは、病気である妻をいくらかでも喜ばせようという隠された目的が別にあつたのだから。

彼は、ストーヴの上で沸騰していた薬缶のお湯で紅茶をいれ、にこにこして、まるで子供っぽい謎謎でもかけるような調子で、妻の澄んだ眼を視つめながらたずねた。

「ねえ、それは、八つの節に分れてるだろう。ところが、それぞれの節の中心になっているイメージはね、みんな同じような恰

好こうをしているんだよ。わかる?」

彼の妻は、ふだん、彼の日常生活における言葉や行いを通じて、彼が書く詩や批評における発想の根源にあるものを、ほとんど直観的に見抜くことに馴なれていた。それで、その謎を解くことは、たいして難しい問題ではなかった。

彼女はその三枚ばかりの原稿用紙を、何回となくめぐり返しながら、ふと、何か別なことにも考えがひらめいたような様子をして、ゆっくりと口を開き、

「《 * 》でしよう?」
と答えた。

「うん、よくわかったね」

彼は、そうは言ったが、彼女がそれらのイメージの群れに共通している型を、造作なく探しあてたことについて、むしろ当り前のことと思っっているような顔つきをしながら、彼女の前のテーブルに、今度は蜜柑みかんを運んだ。

ほかのひとには、それは必ずしもやさしい問題ではなかったかもしれない。午前零時れいじに、《 * 》に重なっている時計の短針と長針。燃えあがる焰の舌。舞まいあがる噴水。高く聳える樹。とがった形で伸びている塔。屹立きつりつしている山の頂き。歩いていく人間の直立の姿勢。そして、昇のぼっていく太陽。

これらのイメージは、本来のあり方として、それぞれに独自の《 * 》を求めている。しかも、その《 * 》は、ひとしく上昇じやうしやうの志向を秘めているものである。彼女は、希望というテーマに暗示され、これらのイメージが、《 * 》のほかに上昇という共通の特徴をもっていることを、なんとなく快く感じとっていたにちがいない。

彼にとつて、そのとき、希望を語るためには、抽象ちゆうしやう的で観念的な言葉は無力であった。そのためには、《 * 》と上昇が複合されて生き生きと活気づいているような、具体的なイメージの群をもつてするよりほかなかったのである。それは、彼のいわば本能的な計算によるものであった。それらのイメージは、二人の生活のそのときの状況じやうきやうにおいて、優しい愛のオブラートに包まれた激励げきの暗号となっていたのだ。

彼はつづけて、今度は相当むずかしい質問をするよといったような、しかし、いくらかおどけた調子で、

「じゃ、その八つの部分が、どんな順序で並んでいるか、わかる?」

と、彼女の原稿を持っていない方の右手を、もてあそびながら言った。

彼がその言葉を発音した調子から、彼女はそれを少し不真面目な意味の質問かもしれないと感じたらしく、しばらくして、「そんなこと、わからんだろ」

と、わざと男の言葉を使って答えた。

彼はときどき、実際に、ふざけた質問をすることがあったし、それは、たいてい、あとで種明しをして彼女を笑わせるためであった。ときに、エロチックな種明しもあったから、彼女の返事は、そうした解答もありうることに對する防備のひびきを含んでいた。

しかし、その種明しは、もしかしたら、小学校に行っている下の男の子にも解けるかもしれないような、単純明快で、そしてほとんど無意味なものであった。

彼は、嬉しそうに説明した。

「最初に出てくるのは、お月さまだろう。その次の節では、火が燃えてるね。三番目は、タツノオトシゴを吹きあげている噴水。つまり、水だ。四番目は、高く聳えている木。五番目は、鉄塔だから、金属。六番目は、山の頂きだから、土。七番目は、人間だけれど、これはカッコでくくられているから、省略。最後が、昇りはじめた新しい太陽というわけで、日」

そして彼は、その原稿の一節ずつを、指で抑えつけるようにしながら、

「ねえ、だから、⑧の順序になっているんだよ」とつけ加えた。

彼女は、それで笑った。そんなときにいつも笑うように、無心に、明るく。

それは、彼にとっても、小さな幸福であった。そんなふうに彼女が笑うとき、彼はいつも、結婚する前の彼女の姿をちらりと思いだしてきたものであった。一日中、何かが面白く、何かが可笑しくて笑っているような、彼にとってはとっつきにくく朗らかな少女であった頃の彼女を。

(清岡卓行『朝の悲しみ』より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) シジフォス……ギリシャ神話に登場する人物。

(注2) 「月天心……」江戸時代の俳人である与謝蕪村よさぶそんが作った俳句。ここでは、詩のエピグラフ(作品の最初に置かれる短い言葉)として用いられている。

問一 — 線① 「それらの二つの虚脱きょだつの相似は、まことに奇妙きみょうなことに思われた」とありますが、

(1) 「それら二つの虚脱」とは何を指していますか。「虚脱」につながるように、それぞれ十五字以内で答えなさい。

(2) (1) の「相似」が、「まことに奇妙なことに思われた」とありますが、それはなぜですか。理由を「くから」に続くように本文中から三十字以内で探し、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問二 — 線② 「彼は、それを、終わりのないものであるゆえに羨うらやましいと思ひ、また、幸福であるときさえ感じた」とありますが、

このような表現からわかる彼の心情として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の看護は妻の治療ちりょうの役には立っていないが、妻には生き続けてほしいという気持ち。

イ どれほど必死に努力しても、愛する妻の病気を治すことができない自分を責める気持ち。

ウ 看護をすることがどんなにつらくても、妻のそばにいられてしあわせだという気持ち。

エ 過酷かこくな仕事を永遠に続けるよりも、妻が病気で苦しむのを見る方がつらいという気持ち。

問三 — 線③ 「その悲しみの性質」とありますが、この「悲しみ」とはどのようなものですか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 生きる上で必ずだれかを傷つけてしまう悲しみ。
- イ 愛する人を永遠に失ってしまった時の悲しみ。
- ウ 妻の死を予感しながら生きなければならぬ悲しみ。
- エ 自分をいつわって生きなければならぬ悲しみ。

問四 (A) (C) にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア なぜなら イ また ウ しかし エ むしろ

問五 (D) (F) にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア しつとりと イ のんびりと ウ やんわりと
- エ ぼんやりと オ ぽっかりと カ ちらちらと

問六 — 線④ 「逆に深く引き離している」とは、どのような意味ですか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 空は砂漠に比べてあまりに高いところにあるということ。
- イ 地平線のあるはるか遠くのところまで見渡せるということ。
- ウ 建物や樹木が何もなく、地平線が真っ直ぐに見えるということ。
- エ 空の青と砂漠の黄色の色の違いが際立っているということ。

問七 — 線⑤ 「無縁な花花」とありますが、何と「無縁」だということですか。十五字内で答えなさい。

問八 — 線⑥ 「彼にとって二重に貴重であった」とありますが、どのような点で貴重なのですか。それぞれ二十五字以内で二点挙げなさい。

問九 《 * 》にはすべて同じ二字の熟語がはいりますが、それを詩の中から探して抜き出して答えなさい。

問十 — 線⑦ 「げきれい激励の暗号」とありますが、詩の中のイメージはどのような「げきれい激励」を伝えているのですか。十字以内で答えなさい。

問十一 ⑧には七つの文字が入ります。正しい漢字ですべて答えなさい。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

義務教育で習う社会科はおもに地理と歴史であり、経済は公民の一部として社会のしくみを学ぶといった程度の位置づけにすぎない。たしかに経済的に自立できない小中学生は経済学を習うには早すぎるのかもしれない。「小中学校の社会科にも経済学を」などといったら、子どもに規律や道徳を叩き込むべきという論者たちからは、「カネ勘定より先にもつと教えることがあるではないか！」というお叱りの声^{しか}が聞こえてきそうである。経済学者の奮闘努力^{ふんとう}の甲斐^{かひ}もなく、相変わらず経済学を何でもカネで片^①を付ける学問だと思っている人が多い。

それでも最近では、子どもに経済を教えようという動きが出始めている。たとえば、『はじめまして！ 10歳^{さい}からの経済学』というシリーズ本は、「もしもお金^{かね}がなかったら」「もしも国営会社が民営化されたら」などのテーマで市場経済の仕組みを子どもにわかりやすくして生活するという市場経済の疑似体験^{ぎじ}を通じて子どもが経済を学べるようになっていく。

こうした試みは子どもが早い時期から経済の仕組みを知っておくという点では評価に値するだろう。心の準備ができてから社会^②に出て行くのも悪くない。また、大人^{おとな}になってからいたずらに市場経済を怖^{こわ}がることなく、自分もその一員として動かしているという意識が働きやすくなるだろう。(A)、^③こうした学習は経済学の一面を扱^{あつか}ったものに過ぎない。経済学は人間のカネにまつわる活動だけに注目するものではない。その視野は一般^{いっぱん}の人が考えるよりもずっと《あ》。子どもには経済の仕組みだけでなく、社会の見方としての経済学の基本的な思考法を教える必要がある。

人間には「豊かになりたい」「楽をしたい」という基本的欲求がある。その一方で世の中の資源には限りがあり、すべての人間の欲求を最大限に満たすことは不可能である。そこでモノやサービスに価格をつけ、働いて稼^{かせ}いだ所得の範囲^{はんい}内で欲求を満たすような仕組みを作っている。

その際、価格が付与されていることがとても重要である。買う側の人に対しては、苦勞して稼^{かせ}いだおカネで買ったモノやサービスだから大切に使うというインセンティブ^④を与える。他方、売る側は、より多くの収入を得るため、買い手に喜んでもらえるような質の高いモノやサービスを提供しようと励^むむ。このことは、消費者に必要とされていないものが無駄^{むだ}に作られないようにすると同時に、皆^{みな}に必要とされているものが浪費^{ろうひ}されることを防ぐ働きをする。これが市場メカニズムと呼ばれる機能である。

こうした市場の働きはつねに万全というわけではない。(B)、市場機能をあえて使わずに存続しているモノやサービスもある。(C)、教育サービスのもつ公共性や外部性をすべて市場に担わせようとするは無理が生じる。なぜなら、こうした教育の効果は国全体として評価されるもので、費用の負担者が欲求を満たすという市場での取引関係が成立しにくいからである。したがって、どこの国でも基礎的な教育サービスは義務教育として国家が無償で提供しているのである。

家庭内でのサービスはカネでやり取りされているわけではない。夫は妻に夕食代を払わないし、子どもが親から教えてもらう勉強はタダである。その理由は、家庭内サービスはいちいち料金を設定するよりも、信頼関係に基づいて提供した方がかえってコストがかからないからである。しかし、市場経済のようなドライな取引では済まない夫婦や親子間では、いったん信頼関係が失われると家族を形成していることが不利益になってくる。実質的には崩壊している家族を無理に維持させようとするれば、家庭内暴力や熟年離婚といった形で歪みが表れるのである。

④ 日本の伝統文化は、市場機能をなるべく排除することで生き残っている領域である。X ため、無防備に市場での競争に晒すと近代的で高機能な新しいサービスとの競争に負けてしまう。そこで出来る限り競争的な要素をなくそうとする。流派ごとと所作を差別化し、家元のカリスマ性を高め、年功制を導入しているのはそうした工夫である。(D) 市場で他のサービスとの客観的な比較が困難なようにしているのである。そして伝統文化の継承者たちは他とは差別化された独自のルールのもとで一部の熱心なファン層に支えられて生計を立てている。

このように経済学の守備範囲はカネ勘定を主体とする市場経済だけに限らない。合理性からほど遠いと思われるような家庭や伝統文化であっても、そこに属している人間行動を説明するための考え方として利用可能なのである。このことは、社会経験のない子どもにも経済学の考え方が十分に理解できるといふことを意味している。

経済学ではどんな社会現象にも必ず理由があると考える。なぜなら社会現象をもたらすのは人間の行動であり、その背後には何らかのインセンティブが存在しているからである。人間が自らの意思でとった行動であれば、「(I)」は愚問である。なぜなら「やりたかったから」という答えが返ってくるに決まっているからだ。より意味のある問いは、「(II)」という動機についての質問である。動機さえわかれば、仮にその行動が社会にとって望ましくないものだったとされたとき、次からそうした行動をとらせないようにすることもできる。

他方、人間には意図しない行動もある。その典型が過失である。だれでも失敗しようと思つてするわけではない。したがって、本人の意図しない行動について叱りつけることはほとんど意味がない。この場合は、「何がその人を失敗に追い込んだのか」あるいは「なぜその人は知らずに失敗に結びつくような行動をとってしまったのか」について考えるのが望ましい。

世の中には、子どもというものは純真で汚^{けが}れがなく、経済学がいうところの合理性や打算など当てはまらない存在だと思つている人が多くはないだろうか。私に言わせればこの先入観こそ子どもをナメている。人間の性格や気質が先天的なものか遺伝的なものか、あるいは家庭環境^{かんきょう}によつて決まってくるか定かではない。しかし、いずれのケースでも純真さや汚れのなさという観点から子ども全体を眺^{なが}めてみれば、大数の法則に従つて、その度合いは正規分布すると考えるのが妥当^{たとう}ではなからうか。ようするに、純真な子どももいればそうでない子どももいる。これは大人の世界とほとんど同じだろう。

私には子どもイコール純真と頭から決めつけることの危険性の方が大きいように思える。つまり、純真だからすべてのクラス仲間と仲良くなれるはずだとか、早期に道徳心を教え込めば純真なままで育つとかいう思いこみで子どもと接すると、とんだしつぺ返しを受けたり、かえつて子どもの行状を歪めてしまつたりする可能性があるということだ。

(E)、社会をよく知らない子どもは羞恥^{しゅうち}心や銜^{てら}いといった世間体^{せけんたい}を気にするところがないため、欲望がストレートに出やすく、まかり間違^{まちが}えると大変なことをしでかす存在と考えた方がいいのではないだろうか。だからといって、子どものこうした行動パターンを悲観的に考える必要はない。なぜなら、子どもは損得で動く「経済人」であつて、適切なインセンティブさえ付与してあげれば、社会にとつて望ましい行動をとるようになるからである。子どもが親を映す鏡、あるいは社会を映す鏡というのは本来そういう意味だろう。別に子どもは親や大人の真似^{まね}ばかりをしているわけではない。素行の悪い子どもの姿は、適切なインセンティブのつけ方を考え出すことすらできない大人の社会の愚^{おろ}かさ象徴しているということである。

たとえば、子どもを厳しく教育する親がいたとしよう。有^う無^むをいわさず決まつた時間に勉強机の前に座らせたり塾^{じゅく}に通わせたりし、そして不正は許さず門限は厳しく、子どもが間違^{まちが}つたことをすれば体罰^{たいばつ}も辞さないという感じである。さて、このような親からどのような子どもが育つだろうか。

子どもが従順で親の言いつけにすべて素直に従い、全く不平を漏^もらさないようなタイプだったら親の期待通りに勉強の出来る

真面目な大人に育つかもされない。しかし、それが必ずしも子どもの意に添わぬもので、自分の意思を抑えながら従っていたのだとすると、成人してから鬱や摂食障害などの心の病を発症するかもしれない。

他方、子どもが合理性をもつ「経済人」だったとすると、こうした厳しい教育は全く期待はずれの逆効果になる可能性が《い》。子どもの意に反して無理に勉強させようとすると、子どもは勉強の振りをするようになる。塾に通っているように見せかけてゲームセンターに入り浸るかもしれない。躰にかんしても同じ結果を招くだろう。不正を許さない親に対して、合理的に行動する子どもは不正を隠すようになる。なぜなら、親に知られたら厳しく叱られるからだ。ようするに厳しい教育は子どもにごまかしをするインセンティブを与えてしまうのである。

子育てする親にとって重要なことは、子どもがどのように育っているかを知っていることである。親は子どもを二四時間監視できないので、学校での生活や友だち付き合いにかんする情報を子ども自体から教えてもらう必要がある。そのとき重要なことは、子どもが正直に話してくれるかどうかである。親に叱られるのを嫌がって子どもが嘘をつくとき、親は子どもの現状を正しく把握しづらくなるのである。

子どもを嘘つきにしたくなかったら厳しい教育をすべきではない。経済学から導かれる正しい処方箋は二つある。ひとつは、子どもの話をしっかりと聞いてあげることである。面倒がって子どもの話をいい加減に扱うと、次回から子どもは家庭で話をしなくなる。もうひとつは、子どもが自分から正直に話したら決して叱らないことだ。叱らずに子ども自身のためになるようなアドバイスをしてあげるのが効果的といえる。

(中島隆信『子どもをナメるな——賢い消費者をつくる教育』)

*出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注) インセンティブ……刺激。

問一 (A) (E) にあてはまる最も適当な語を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア さらに イ すなわち ウ しかし エ むしろ オ たとえば カ また

問二 — 線① 「経済学を何でもカネで片を付ける学問だと思っている人が多い」とありますが、これに対して筆者は「経済学」をどのようなものだと考えていますか。本文中から十五字で抜き出して答えなさい。

問三 — 線② 「心の準備ができてから社会に出て行く」とありますが、「心の準備ができ」とはこの場合、具体的にどのようなことを意味していますか。本文中から十五字以上二十字以内で抜き出して答えなさい。

問四 — 線③ 「こうした学習」の具体的説明として正しくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 市場経済のしくみをわかりやすく説明した本を読むこと
- イ 義務教育の公民の一部として、社会のしくみとしての経済を学ぶこと
- ウ 社会の見方としての経済学の基本的な考え方を学ぶこと
- エ 市場経済の疑似体験を通して経済を学ぶこと

問五 《あ》にふさわしい一語を自分で考えて、漢字かな交じり二字で答えなさい。

問六 — 線④ 「日本の伝統文化」について、筆者の主張に合う具体例を次の中から選び、記号で答えなさい。答えは一つとはかぎりません。

ア 折紙 イ 映画 ウ 華道^{かどう} エ 野球 オ 能

問七 X にあてはまる最も適当な表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 芸術性が高い
- イ 利便性が高い
- ウ 独創性が低い
- エ 実用性が低い
- オ 公共性が高い

問八 (Ⅰ)・(Ⅱ) にあてはまる最も適当な表現を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア どうしてそれをやりたかったのか
- イ だれがそんなことをしたんですか
- ウ 何度言ったらわかるんですか
- エ どうしてそんなことをしたんですか
- オ どうしたらやめてもらえますか
- カ どうしてもやりたかったのか

問九 — 線⑤ 「純真で汚^{けが}れがなく、経済学がいうところの合理性や打算など当てはまらない存在」とありますが、これと対照的な「子供」についての表現を、本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問十 《い》にふさわしい一語を自分で考えて、漢字かな交じり二字で答えなさい。

問十一 本文の筆者の主張として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 競争をなくし、古き良き文化を皆で守るような、平和な社会の実現をめざすべきである。

イ 未来のある子供に対しては、実社会と切り離れたテーマパークのようなどで、優しく道徳教育を行うべきである。

ウ 他人よりも豊かに暮らしたいという欲求は、近代社会成立以降に生じたものであるから、これを絶つには、それ以前の社会システムに戻す以外に方法はない。

エ 経済についての教育の遅れを学校のせいばかりにせず、各家庭が子供の幼い頃より所持金の自己管理を厳しく促すなど、率先して行うべきである。

オ 経済学についての誤った先入観を排し、社会を生き抜く一つの知恵と捉え、子供の教育に組み入れるべきである。

三次の——線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

- | | | | |
|---|--------------------|----|---------------------------------------|
| 1 | 彼には理系のソシツがある。 | 2 | カタログをユウソウする。 |
| 3 | 森の中をサンサクする。 | 4 | 大変な作業にネをあげる。 |
| 5 | 動物のヒカクを加工する。 | 6 | モクソクでだいたいの距離 <small>きょり</small> をつかむ。 |
| 7 | にんじんなどのコンサイルイを食べる。 | 8 | オウキユウ手当のおかげで助かる。 |
| 9 | 父を師とウヤマウ。 | 10 | 羊をホウボクする。 |



国語解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)

一問一 (1)

虚脱きよだつ

(2)

虚脱きよだつ

から。 問二

問三 問四 A B C 問五 D E F

問六 問七

問八

問九 問十

問十一 問十二

二問一 A B C D E

問二

問三

問四 問五 問六 問七 問八 I II

問九 問十 問十一 問十二

三

9	5	1
う		
10	6	2
	7	3
	8	4

評	点



受 験 番 号

氏 名